

●貧弱な庭に招きしズッキーニ巨木となるは思いもよらず

大橋千佳子

スーパーの売り場でしかみていないズッキーニ。巨木となる、というこの歌に、思わず画像検索をしてしまった。ウリ科カボチャ属の果菜だという。手を出しにくいものだったが、いつかレシビ（次第）でつかうようになった。作者は栽培したということ、それも初めて（一連タイトルは、「この夏の初めて」）。そこには、招きし、という積極性と、何か謙虚なものがある（上句）。ズッキーニ四首のうちの四首目はこれ、

ズッキーニ在りしマルチは堆く目にも舌にも盛夏懐かし

「マルチ」とは、畑のうねをビニールシートやポリエチレンフィルム、ワラなどで覆（おお）うことで、英語の「マルチング」を略（りやく）したことばだという（農林水産省）。これがしらなかつた。また次の歌に共感する。ほか、ヒデオシ、電電公社、スマホデビュー、ウクライナの歌。

電動の草刈り機はたと止まりて無力なわたし庭に残った

●おつとりとしていますね。と言はれても心の裡は大波小波

河村郁子

引用句部分が句点で終わっている。句点で、おつとりとしていますね、このことばから距離を置いている感じ。そうみえるということの内実が下句。「若き日のパニック障害…」のような歌（これが次歌）。タイトルは「マインドフルネス」。週刊誌も月刊誌も表紙が目次になっているようなところが、そこだけ読んですまずこともする。それで、次の歌、

目を留める『PRESENT』の表紙には〈最高の瞑想・たった1分〉

求めたる雑誌抱へて帰路急ぐそのみにして気持ち安らぐ

雑誌に何があるのか。求めるというアクションを起こしたことは確か。策、とか好機とか、まづ始む、がある。

●たちまちに浮かびくるなり東京の初に住みたるアパート付近

布宮慈子

タイトルが「杉並区」なので、この歌のアパート付近も杉並区のものか。それも杉並区下高井戸。下高井戸も今や全国区かもしれない。三、六首目が次の通り、

折りも折かつて住みにし下高井戸の住所の人から歌集が届く

建物の裏手に畑の残るころわれは住みにき杉並区下高井戸

このあいだの歌で、やや特別な記憶に次の歌があり、これは面白いな、とおもったし、時代もあ

るかな、ともおもった。

お茶室の上が部屋にて条件は「うるさくしない人」にてありき
じつのところ、これらの歌はついでのものかもしれない。それは、次のような歌、

杉並の区長選挙がおもしろいことになってをると知る六月

そうして、(僅差で) 新人女性候補者・岸本さん当選せり、という歌(一連最終の歌)、の通り。
作者にとってはこちらが当初の関心か。

前号作品短評B 〈慈子〉

● 休日の前田道路はしずかにて会社の旗かポールにし揺る

小野澤繁雄

前田道路は、平日であれば通行量が多いのだろう。休みのきょうは静かで、会社の旗なのかポールにくくり付けられて揺れているだけだ。「し」に特別な意味はなく、語調を整え、上の語「に」を強調していると解釈。作者は、時折「し」を語調のために使うのだが、その使い方は巧みである。

つながった通学班ひとつが出て行って残るひとつも縦列のまま

通学班としてつながっていた一つが出て、残りの一つも縦に並んだままである。これから出発しようとしているところか。通勤通学の時間、歩道は狭いから小学生は1列縦隊の形で進むのだろう。今は会話もできず、見ている通学が楽しくない様子だ。マスク着用はいつまで続けるのだろうか。

● はたた神人工骨よそろそろ歩め

新野祐子

はたた神は、鳴りとどろく雷のこと。股関節の手術で人工骨を入れた友人は、早くもリハビリで

歩かされる。激しい雷の音のなか、そろりそろりと歩きはじめる。見守る作者は、ゆっくりでいいんだよ、とでも声を掛けているのかもしれない。はた神とりハビリの取り合わせの妙。

ハクビシンに勝った西瓜の腹撫でる

あるじ待つ馬鈴薯畑沸き立って

友人が入院中に時折、その畑を見てあげていたようだ。昨今、ハクビシンに荒らされる畑が多いと聞く。害獣除けのネット等でハクビシンの害に遭わなかったスイカよ、おまえは偉い、と撫でてやる。ウイットに富んだ句である。またジャガイモを植えた畑も恐らくはあるじの退院を喜んでおり、帰りを待っているのだ。

● 静謐になりいるめぐりコロナ禍の長き日々にて夏はゆくなり

市川茂子

身辺は静かで穏やかになってきているが、長く続くコロナの騒動が終わらないまま今年の夏も過ぎていくようだ。新型コロナウイルスの変異株やら何やら、個人ではなんともしがたい世の中である。

人生を上出来と言う作家にて九十七の断筆宣言

果つるまで書くとう佐藤愛子さん前年の言を撤回したり

言わずと知れた元気な老作家・佐藤愛子は九十七歳で断筆宣言をしたらしい。が、翌年になって撤回し、死ぬまで書くと言っているのだ。自分と似通った年齢の人と比較するのは誰しもあるこ

と。わが身の元気の素となることもあるだろう。ちなみに佐藤愛子の近著は『ああ面白かったと言って死にたい』『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』など。タイトルだけ見ても破顔するような本である。

● 一時間に百ミリの降雨とふわが市を報ずる全国ニュース

梅津純子

ことし山形県の南部では大雨でたいへんな被害があった。その時のことだろう。

想定は床下浸水その上はあり得ぬ地形と見極め来り

障子照らす稲妻に目覚めつつ朝までの雨の量案じをり

大丈夫だろうと思っても降りやまぬ雨に心配で不安な一夜が明けてゆく。一連の歌は、刻一刻と変わりゆく雨の様子と作者の心理を映し出している。

次々とラインに見舞ふは女友固定電話は遠き男の友

女友達とは常日頃からさまざまな携帯電話のアプリを使って連絡をとっている。LINE^{ライン}もその一つ。大雨の見舞いなどはケータイに文字が届いて、見てくれればそれでよし、というくらいのもの。しかし、ふだん連絡を取り合っていない男の友達は固定電話で掛けてくるのだ。今どきの通信事情と男女の対応の仕方が現れていて面白い。